明神山の物知りだぬき

高畠町商工会青年部

明神山の物知りだぬき

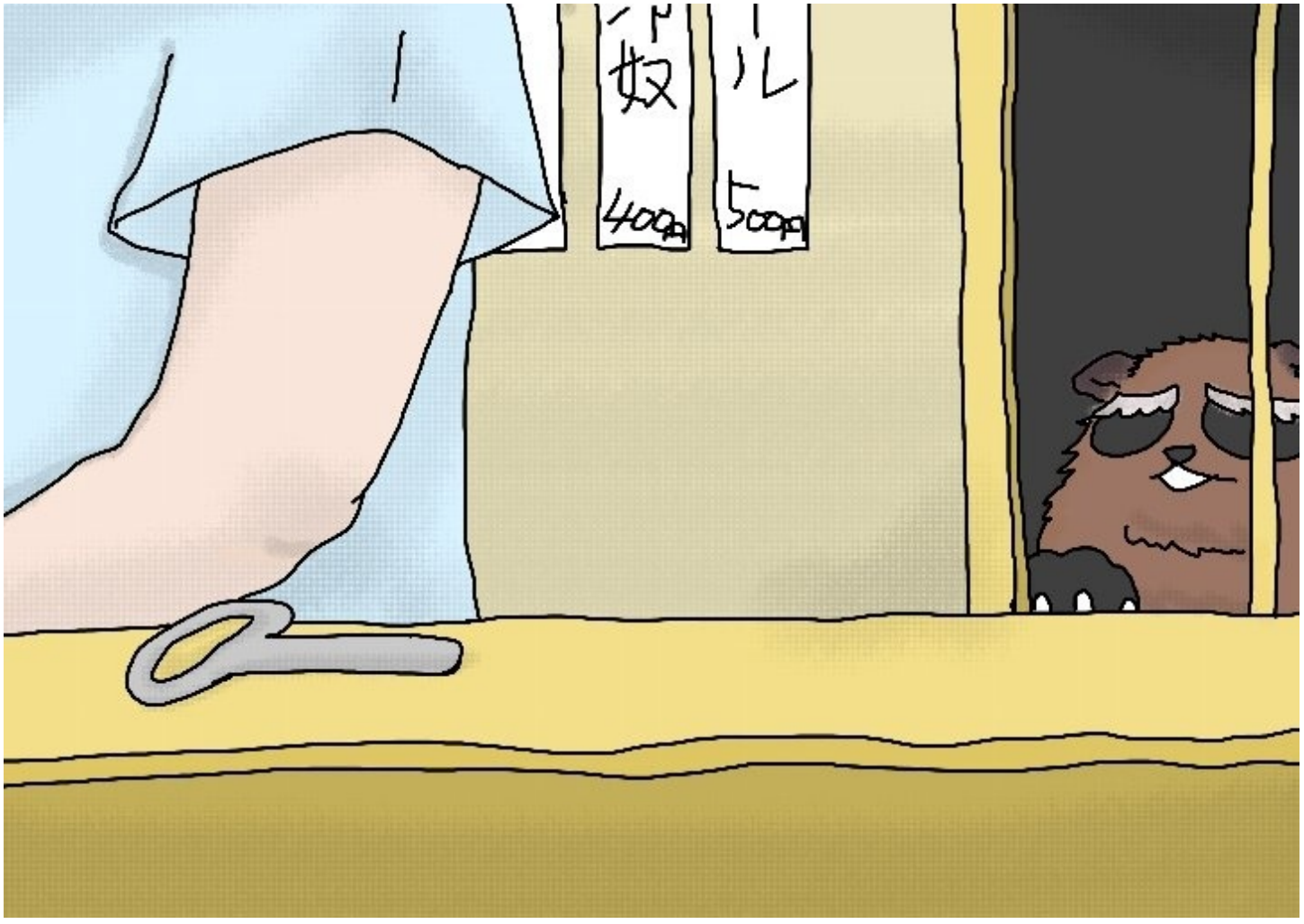
高畠町でタヌキというと
犬の宮で悪さをしたタヌキを思い出しますが
当世ではタヌキもだいぶ丸くなってまいりまして。
明神山のほら穴に
大吉というタヌキのじいさまが住んでおりました。
そこに一匹の子だぬきがやってまいります。
「こんちわぁ　大吉じいさんいますかぁ」
「おや、どうしたねポン吉じゃないか
珍しいね　まおあがり」
「おじゃします　でさ、大吉じいさん
　町に行ってこんなの見つけたんだけどさ
　じいさんなんだかわかるかい？」
「お前あれほど町には行くなといわれてるだろう
　車がすごい勢いで走ってて
　ほれ向こうの山のポコ助もこの間…」
「ううん　そんなのはわかったからさ
　こいつがなんだか教えておくれよ

　じいさんどんなことでも知ってるんだろ
　おいら気になって気になって
　夜も眠れないんだよ　昼寝はするけど」
「まったくしょうがない小僧だ
　どれそいつを見せてみぃ」

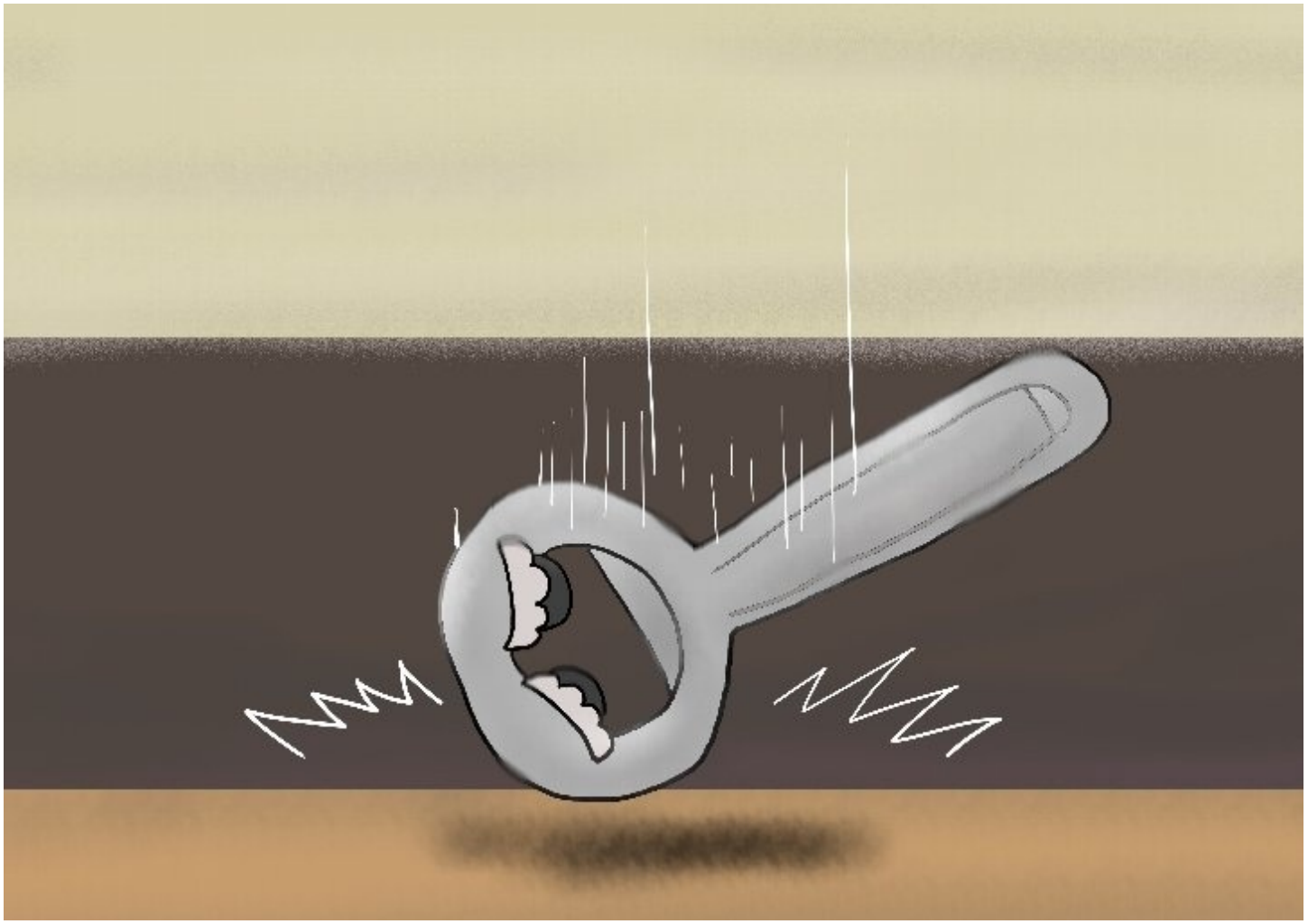
「うん、これなんだけどね」
ポン吉は持っていた「栓抜き」を手渡しました。
「ふむこれは　きのこ……のようできのこではない
　固くて平べったいし　穴が開いておる
　かぎ……　のようで　かぎではないな
　ここの棒のところにギザギザがついてない……」
「そんな思わせぶりはいいからさ
　スパッと答えを教えておくれよ」
「これについてそういう
見解もあるのではないかと思い多角的な面から
さまざまな可能性を考察することで……」
「ちょっと大吉じいさん
　なんのコト言ってるのかわかんないよ
　ははぁん
　じいさんほんとはこれが何か知らないんだろう」

そのとき外の木の枝に止まっている鳩が
「ドードーホッホー　ドードーホッホー」
と、三回鳴きました。
「おやもうこんな時間か
すまんがワシは日課の散歩の時間じゃ
　また明日おんなじ時間にここに来なさい
これについてはそのとき教えてやろう
それじゃぁな」
そういうと大吉じいさんは
そそくさとほら穴を出て行ってしまいました。

「さて……ポン吉にはああは言ったものの……
困ったぞ
　なんに使うのか皆目見当もつかん……
　だが確かに昔どこかで見たような記憶は……
　おお、そうじゃ確かあの辺で……」
　大吉じいさんはあたりが薄暗くなるのを待つと
古い記憶を頼りに町のある場所を目指して
ゆっくりと歩いていきました

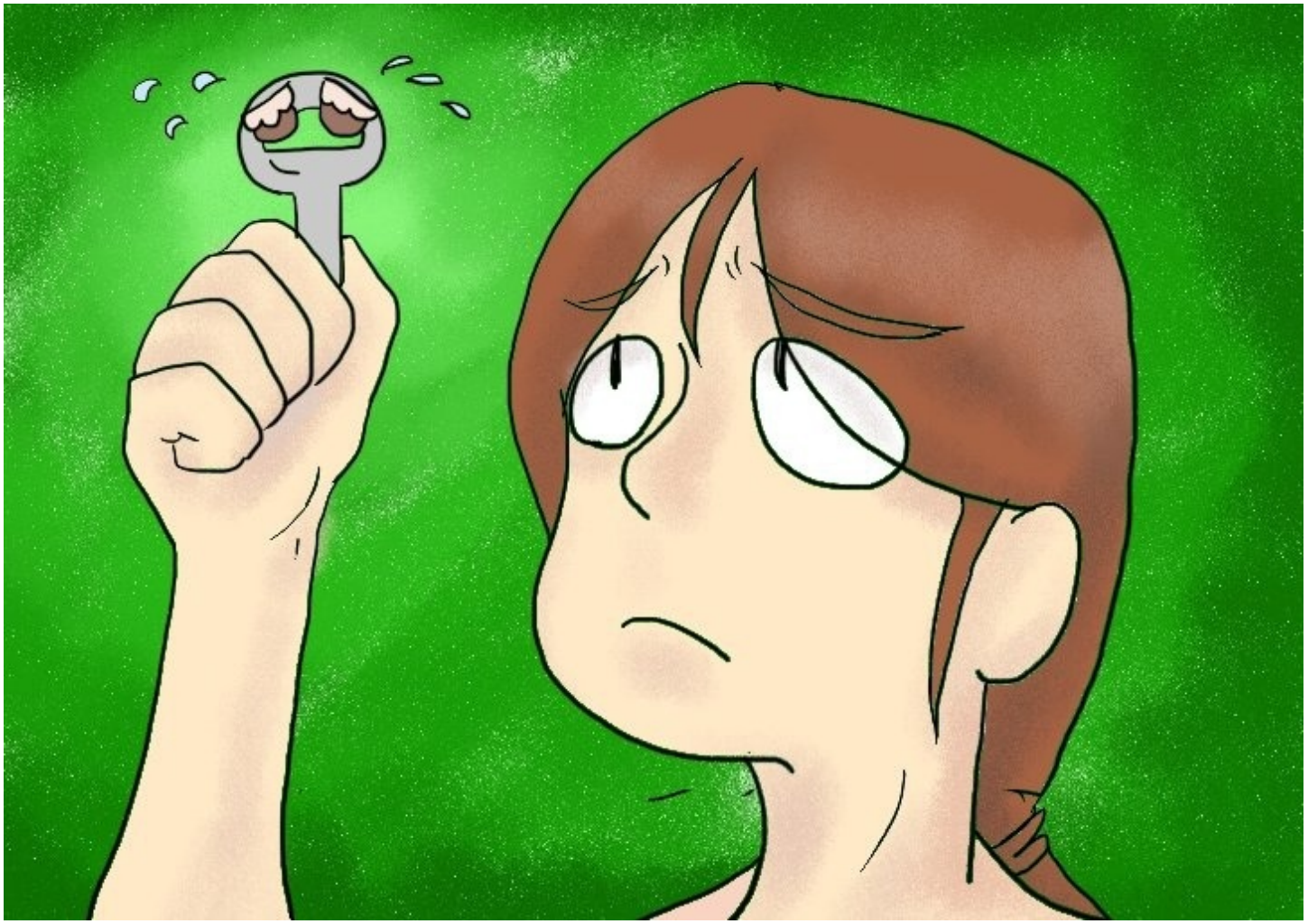


じいさんが向かった先は商店街にある
ある飲み屋さん。
開いている窓からお店の中をそっと覗き込むと
「お、あったあれじゃな　あの台の上にあるのが
ポン吉が持ってきたものと同じモノだな
どうれ、こうしてみていれば
今に何に使うものかわかるじゃろうて」
大吉じいさんがそうやってのぞいていると
突然、窓のならびにあった
勝手口の戸がガチャリと開きました。
「しまった、みつかってしまうわい
　ええぃこうなったら
　ンむにゃらむにゃらのえぃっ！」

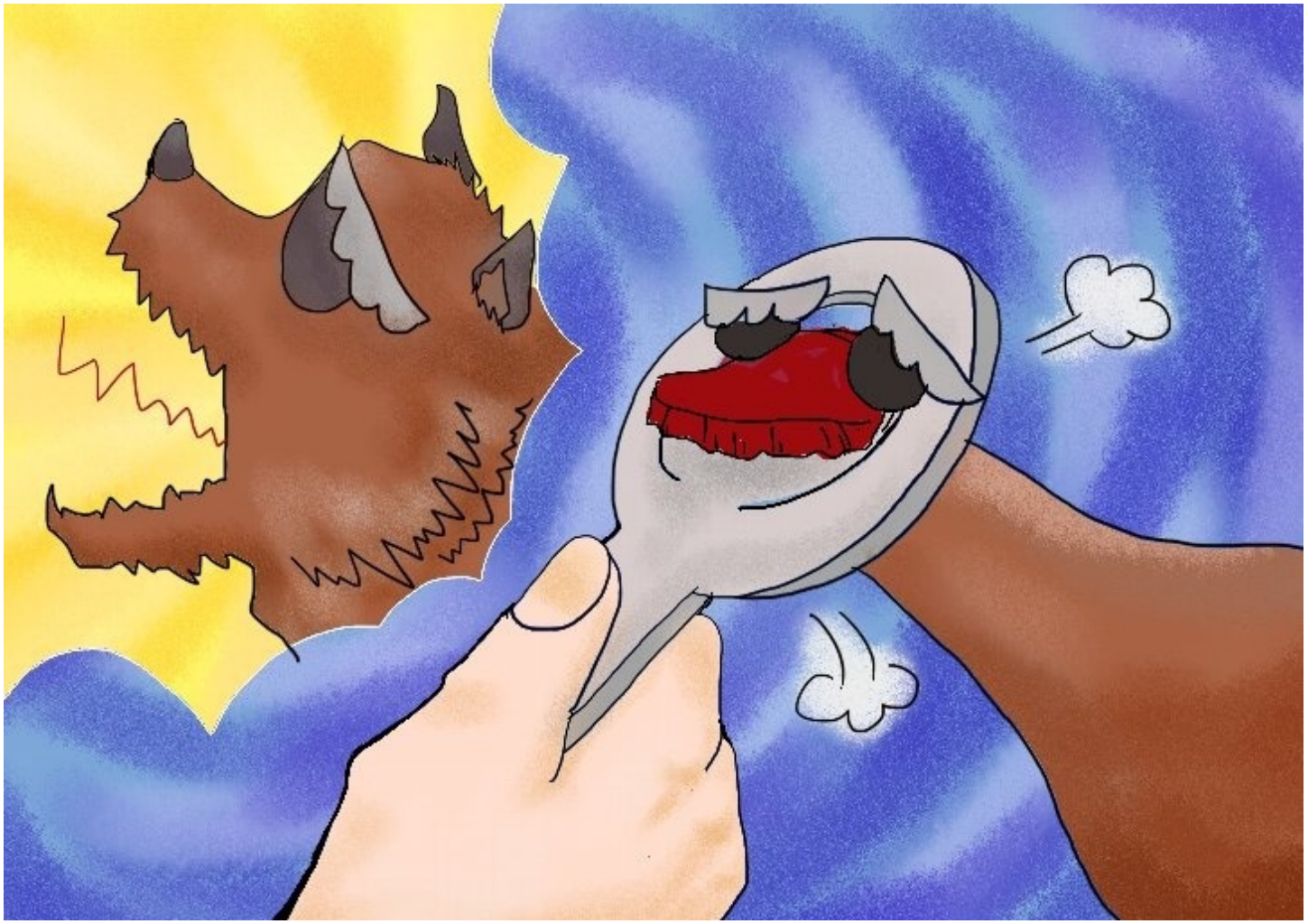


　大慌てで変身した大吉じいさん
　ずっと栓抜きのことばっかり
考えていたモンですから
　とっさに栓抜きへと化けてしまいました。
　そうして栓抜きに変身した大吉じいさんは
開いていた窓から店の中にポトン
そこへお客さんがやってきました。
「ばんわ　とりあえず生一丁！」
「あぁ　すみませんね
なんだか昨日の晩から
サーバーの調子がおかしくて
今日はビンしかないんですよ
そのかわりキンキンですから」
「あ、そう　じゃしょーがないね
　そんじゃキンキンのトコひとつ」
「はーい」

　おかみさんビールとグラスを用意しまして
さぁその栓を開けようと思いますが
肝心要の栓抜きが見当たらない。
先ほどカウンターの上に
おいてあるといいましたが、
人間気がつかないときは
どうしたって気がつかない。
どこだどこだと探しておりますと……
窓の下に
ぽつんと落ちてる栓抜きを見つけました。
大吉じいさんの栓抜きです。



「なーんでもーこんなところにー」
　おかみさん急いで拾い上げますが
　何やらみょーにやわらかいような手触り
　そしてじっとりと
汗でもかいているかのような湿り気と温かさ
「？　？　？　」
不思議な手触りにしばらく眺めるおかみさん。
大吉じいさんばれてはいけないと
息を止めて体に力を入れて
ピーンと栓抜きのふりをします
「ねーぇ　ビールまだー？」
「はーいただいまー」



　お客さんが待っているのを思い出したおかみさん
　大吉じいさんの栓抜きをささっと拭くと
　ビールの栓にいつもどおりに引っ掛けて…

「はうっ！」
「……なんの声……？」
　しゅぽんというガスの抜ける音に混じって
なんか変な声が聞こえたような気がします。
が、お客様をお待たせしては大変だと
おかみさんは栓抜きをカウンターの上に置くと
ビールを運んでいってしまいました

「うっ、んぬっ　あぁあぁ腰が……
まったく散々な目にあったワイ
しかしまぁこれでポン吉のやつめに
こいつの使い方を教えてやれるというものよ
さてとあとはここからどうやって
気づかれずに逃げ出すかじゃが…」
そのときです
「おねーさーん　ビールおかわりー」
「はーい」
「何じゃこいつ、まだ飲むのか
　えぇい　またあんなことをされてはかなわん
　腰の骨がおかしくなってしまうわ」

　大吉じいさんはなりふり構っていられません
　栓抜きから足と尻尾だけを出し、
ビールを飲んでいたお客を尻目に
スタコラホイと逃げ出してしまいました。
そこにビールを持ったおかみさんが
奥から出てきました。
「はい、お待ちどう……あら栓抜きがないわ……」
「あ、やっぱ開けなくていいわ、
　なんだか今日は回りが早いみたいだ。
おあいそおねがい」

あくる日
「ポン吉や　これは栓抜きといってじゃな
　人間が飲み物の入っているビンを
開けるときに使う道具なんじゃよ」
「そんなコトよりじいさんその腰！」
「そんなコトとは何じゃ　人がせっかく……
　いやいやなんでもない　とにかくこれは……」
「はいはい　人間が飲み物のビンを
開けるときに使う道具だね
　そんなことよりさ、また面白そうなもの
拾ったんだよね　何かなこれ？」
　とポン吉が取り出したのは、木の棒の先に
黒い鉄の短いかたまりがついたものでした
「いいかいポン吉や
確かに人間は面白そうなものをたくさんもっとる
　じゃがまずはタヌキの世界のことを
第一に勉強することじゃ
　その道具のことは
お前が立派なタヌキになったときに教えてやろう
　今日は腰が痛むからこの辺でな」

「はぁい　じゃ大吉じいさん　お大事に」
　ポン吉は少しがっかりしながらも、
元気な足取りで山の中にかけていきました